

大学生における身体満足、孤独感、他者軽視の 特性的自己効力感への影響

Influences of physical satisfaction, loneliness, and undervaluing others on
generalized self-efficacy in university students.

森平 准次

序論

Bandura (1977) が提唱した自己効力感 (self-efficacy) の概念を端的に言えば、「ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信」(坂野・東條、1993)である。自分がある行動をとった時にそれがどの程度成功するかという確信であり、この確信は行動の遂行へとつながるものであり、行動するかどうかについて重要な決定因となると考えられる。個人が自分の行動に対して成功できると認知するかどうかはその個人の行動に大きく影響を与えるとされ、また適応の問題とも関連し「自己効力感の理論は着実に実証的なデータを積み重ねながら、心理的適応と不適応において、また情緒と行動の問題への効果的な介入において重要な役割を果たしてきた」と指摘されている(三好・大野、2011)。

自己効力感について考える際に Sherer, Maddux, Mercandante, Prentice-Dunn, Jacobs & Rogers (1982) は、個人の自己効力感がどの程度一般的か、という水準で検討できることを指摘している。すなわち、当面している課題や場面に対して特異的にその個人の行動に影響を及ぼす領域固有の自己効力感と、より一般的に、より長期的に個人の行動に影響を及ぼす一般化された自己効力感である。一般化された自己効力感は特性的自己効力感(成田ら、1995)や人格特性的自己効力感(三好、2003)と呼ばれ、GSE (Generalized Self-Efficacy) と略されることが多く、本研究でも以下この略語を用いる。

GSE は精神的健康との関連についての研究が多くおこなわれ、精神的な健康に与える要因も検討されてきている。例えば Andersson, Moore, Hensing, Krantz & Staland-Nyman (2014)の調

査では GSE の低い男性と女性は、GSE の高い人に比べて精神疾患に罹患する可能性が高かった。また、Hwang, Maverick, Savini, & Newman (2014)は青年期の母親の生活の質 (QOL) と GSE に相関があることを報告している。

このように GSE が精神的健康に影響を与えていることを示唆する研究がある一方、三好 (2007) は大学生を対象にした調査で、Erikson (1959) の漸成発達理論における第 I 段階の発達主題である基本的信頼感と GSE が精神的健康に与える影響について調べている。それによれば、基本的信頼感は GSE と精神的健康に影響を与え、「精神的健康の変動の約 31.4% を説明しているが、GSE によって説明される変動はほとんどない」結果となった (三好、2007)。すなわち GSE は直接的には精神的健康に影響していないということが示されている。ここで三好 (2007) が精神的健康を測定するために使用した質問紙は GHQ 精神健康調査票 (中川・大坊、1985) であり、抑鬱・不安や活動的快など現在の精神的健康の状態を示すものである。三好 (2007) は、この結果があくまでも GHQ を精神的健康の指標としたものであり、他の指標を用いた場合の結果を確認することや、GSE の概念に関するより多層的な研究が必要であると述べている。心理臨床においても、坂野・東條 (1986) がその実践においてクライアントに適切な行動を獲得させることを試みる際にその行動の遂行レベルが低い場合には、領域固有の自己効力感と GSE のいずれが低いのかを見極め、それにより介入方策が異なることを指摘している。例えば認知行動療法の遂行にあたっては GSE が重要な意味を持つ可能性がある。GSE がほかの心理学的要因に与える影響や、その与え方については今後も研究で明らかにされることが期待される。これまでも産業領域や教育領域においても、幅広く用いられてきている概念であり、有益な示唆を与えてきていると言えよう。

ところで、GSE が影響を与える要因についての研究は多く蓄積されてきているが、GSE に影響を与える要因についても多様な視点から明らかにしていく必要があるだろう。GSE は人格特性的な概念であり、「思春期や青年期までに形作られ、のちの環境的な影響には左右されない」という可能性が示唆されている (Jerusalem & Mittag, 1995)。人格特性として考えられるのであれば、その形成過程について明らかにしていくことが重要である。三好・大野 (2011) は Erikson (1959) の漸成発達理論 (epigenetic diagram) (Erikson, 1959) を取り入れ、発達の過程の中で GSE が形成される力動について解釈できる可能性を示唆している。三好 (2008) は GSE が、家庭の雰囲気や養育者のあたたかい態度とは弱い相関しか示さず、支配的な養育態度との関連は示さず、発達の第IV段階生産性対劣等感という主題の解決程度と最も関連が強く影響を及ぼす可能性を示唆した。そして GSE は「養育環境によって直接的に規定されるのではなく、健康な初期の人格発達、すなわち基本的信頼感を育む養育環境の中、基本的信頼感、自律性、主導性が有意に形成される中で人格特性として根付くこと」を明らかにしている (三好、2008)。生涯発達や精神分析的理論を取り入れることでより重層的でまた臨床現場や教育現場で用いることのでき

る可能性が広がるであろう。GSE について何がその形成に影響を与えるかについて明らかにしていくことには意義がある一方で、長期的な見通しを持った包括的な検討の難しさも指摘されており（三好、2011）今後の研究の蓄積が期待される。短期的な介入の GSE への効果については、例えば宇恵・辰本（2017）や伊多波・首藤（2016）の調査があげられる。宇恵・辰本（2017）の研究では、大学入学以後に運動・スポーツを実施している学生は実施していない学生よりも GSE が高い値を示している。また伊多波・首藤（2016）の調査では、被災地従事や清掃など作業が主となる奉仕ボランティアへの志向性は GSE に影響を及ぼすが、性別や対人ボランティアへの指向性は影響を与えていないことを確認している。

このように GSE の形成や GSE に影響を与える要因への様々な視点からの研究の蓄積は、ひいては GSE に焦点づけた治療や教育などのプログラム作成に有益であろうと考える。そこで本研究では GSE に影響を与える要因として、身体的な満足度と孤独感、他者軽視について取り上げる。GSE は自分の行動が成功するであろうという確信であるが、身体的な満足感や自信は身体についての自信と関連していると考えられる。身体的な強さは自分ができるという感覚を形成するであろうし、身体的な脆弱さは自己効力感を阻害するであろう。宇恵・辰本（2017）の調査でも、スポーツ行動の有無が GSE に影響を与えていることが示されている。

また、ここで検討する孤独感については、落合(1983) の概念に倣っている。落合(1983)は青年期の孤独感について「人間同士の理解・共感の可能性についての感じ（考え）方の次元」と「自己（人間）の個別性の自覚についての次元」との2つの次元で構成されていると考え、それを測定する尺度を作成している。このような人間関係への考え方は、GSE に影響を与える可能性が考えられる。他者とのかかわりは、他者が代理で物事を遂行してくれる期待や、他者との断絶はそれによって行動成功の可能性が遮断される体験になる、などについて可能性が推測されるからである。孤独感と GSE との関連については、例えば Boer, Elving, & Seydel (1998) がガン患者におけるメンタルヘルスに関連した主要な心理社会的要因であることを示しているし、先述の伊多波・首藤（2016）の調査でも、ボランティアの内容が対人的か作業的かで GSE への影響が異なっている。これらも踏まえ、人間関係への考え方が GSE に影響を与えていることを想定した。

さらに他者軽視については、仮想的有能感の視点から一連の研究が報告されている。仮想的有能感は「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」と定義されている（速水、2011）。他者を軽視することで無意識的に自己の有能性を保証している心の動きとして捉えられ、それを測定するために Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan (2004) による仮想的有能感尺度が開発されている。この仮想的有能感尺度は他者軽視にかかわる項目で構成されており、他者への軽視によって相対的に仮想的有能感を保証していると考えられる。他者軽視の測定で無意識的な有能感を推論することができるのかという問題については、小塩・西野・速水（2009）が、潜在的自尊感情との間に正の相関

がみられ、仮想的有能感の高い人は概して潜在的自尊感情が高いことを示している。また、速水・木野・高木(2004)の研究では、仮想的有能感の高さが個別性への気づき、怒り感情、不快感情経験と正の関連を持ち、生活満足度のいくつかの下位尺度とは負の関連を持つことを明らかにした。このように自尊感情や有能感に関連しているであろう他者への軽視が、GSE にどのような影響を与えているかを検証することは意味があるだろう。

また、自分の行動の成否の価値はジェンダーによって異なると思われる。男性にとってその行動の成功が持つ意味が、女性にとっては全く意味を持たないことがあるだろうし、その逆も多くあるであろう。したがって、GSE の形成に影響を与える要因やその形成過程についても性差がみられる可能性がある。

以上のことを踏まえ、本研究では GSE に影響を与える要因として、身体満足、孤独感、他者軽視を想定し、その影響の有無と程度、さらに男女の差異について、質問紙調査により明らかにすることを目的とする。

方法

手続き 授業時間を利用して集団で質問紙調査を実施した。調査について説明した後、質問紙への回答を求めた。

調査協力者 4年制大学1年次から4年次までの学生に回答を求めた。回収した質問紙の中から、欠損値を含まない有効な131名（男性66名、女性65名。平均年齢19.72歳、 $SD \pm 1.30$ ）の回答を分析対象とした。

質問紙の構成 フェイスシート項目として、質問紙冒頭で所属、年齢と性別を尋ねた。尺度としては、身体満足を尋ねる質問項目、孤独感、他者軽視、GSE を測定するための尺度で構成された質問紙を作成した。質問紙には他に愛着について尋ねる16項目も含まれていたが、本研究の対象としないため省略する。各尺度は以下の通りであり、すべて5件法で回答を求めている。

身体満足を尋ねる質問項目 自身の身体や身体一般についての印象について、16項目を作成し、使用した。

孤独感尺度 落合(1983)の作成した孤独感の類型判別尺度(Loneliness Scale by Ochiai ; LSO)のすべての質問項目を使用した。本尺度は2因子計16項目から成る。「私のことをまわりの人は理解してくれると、私は感じている」等の、理解されている、共感したりされることができることを示す項目で構成された「人間同士の理解・共感の可能性についての感じ(考え)方の次元」を測る9項目をLSO-U、「私の考えや感じを誰もわかってくれないと思う」等の、他者と自己とがそれぞれ個別の存在であることを示す項目で構成された「自己(人間)の個別性の自覚につ

いての次元」を測定する7項目をLSO-Eとしている。本尺度は本来、2因子の各得点の高低から孤独感を4つの類型に判別することを目的として作成されたものであるが、本研究では孤独感の傾向を測定するために用いる。

他者軽視尺度 Hayamizu et al.(2004)で作成された仮想的有能感尺度 (version 2)の邦訳版(速水、2006)を使用した。「話し合いの場で、無意味な発言をする人が多い」「知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い」等の11項目1因子からなる。速水・小平(2006)、小平・小塩・速水(2007)、杉本・速水(2012)は自尊感情が考慮された有能感との混同を避けるため他者軽視尺度と呼んで使用しており、本研究でも質問項目の内容を鑑み、他者軽視尺度として用いる。

GSE 尺度 三好(2003)が作成したSMSGSEを使用した。三好(2003)の完成させたSMSGSEは「主観的な感覚の自己効力感」を測定することであり、回答者が持っている、自分自身で出来るだろうという感覚の程度を尋ねている。完成版は1因子6項目で構成されているが、当初は7項目が作成されており、信頼性係数を高めるために1項目を削除して完成版としている。本研究では削除された1項目も関連する可能性があると考え、質問紙に取り入れ、合計7項目を用いた。

倫理的配慮 質問紙配布時に、質問紙への回答は無記名となっており、また回答は統計的に処理をされ、個人の回答が特定されることはないこと、調査への協力は任意であること、協力をしない場合も不利益を被らないことを口頭で説明しており、質問紙冒頭にも同様のことを明記している。

結果

尺度の検討 本調査では各尺度について各質問項目の因子負荷量が先行研究とは異なる可能性が考えられたため、各尺度について因子分析を行った。

身体満足尺度 本研究では男女による傾向の差異について検討することを含むため、身体像を測定する目的で使用した16項目のうち、「普段男らしい服装をする」といった性差が強調された質問を削除し、8個の質問項目に対して主因子法により因子分析を行った。因子負荷量が.4以上あるものを採用し項目を取捨選択した結果、1因子3項目が抽出された(table 1)。信頼性を測定するためCronbachの α 係数を求めたところ.73であった。本因子は身体について満足しているかを問う内容になっているため、3項目の平均値をもって身体満足得点とする。

孤独感 落合(1983)の孤独感の類型判別尺度16項目すべてについて、因子数を2に固定し因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。因子負荷量が.4に満たない項目を削除し、第1因子が7項目、第2因子に6項目を採用した(table 2)。それぞれの因子について α 係数を算出したところ、第1因子.85、第2因子.82と十分な値であった。第1因子・第2因子共にLSO-U

と LSO-E の項目が混在する結果となった。第 1 因子は誰もわかってくれないといった項目からなっており、第 2 因子は私のことをまわりの人は理解してくれると、私は感じているといった項目からなっている。先行研究の因子構造と異なっているが、抽出された項目の特徴から今回は第 1 因子を個別感、第 2 因子を共感可能性とした。それぞれ得点が高いほど個別感では理解されず一人で存在している感覚が、共感可能性では人間は共感できるという人間の共感の可能性への感覚が高い傾向を示すと考え、それぞれの平均値を各下位尺度得点とした。

他者軽視 使用した 11 項目すべてについて因子数を 1 因子に固定して因子分析を行い、因子負荷量が.4 に満たないものを削除していき、最終的に本研究では 6 項目を採用することとした (table 3)。各質問項目は周囲の人の能力を低く評価している内容となっており、先行研究に従って他者軽視尺度とする。α 係数は.82 であり、十分な値であった。

GSE 三好(2003)の SMSGSE7 項目について 1 因子に固定して因子分析を行った。因子負荷量が.4 に満たない項目を削除していき、5 項目が採用された (table 4)。α 係数は.79 であった。先行研究に従い、逆転項目を処理した平均得点をもって GSE 得点とする。

table 1. 身体満足尺度の質問項目の因子負荷量

質問項目	
現在の自分の体型に満足している	.80
自分の容姿に満足している	.66
自分はスタイルがいいと思う	.61
	寄与率 48.33

table 2. 孤独感尺度の質問項目の因子負荷量

質問項目	因子	
	I	II
結局、人間は、ひとりで生きるように運命づけられていると思う	.80	.22
私の生き方を誰もわかってくれはしないと思う	.76	-.08
誰も私をわかってくれないと、私は感じている	.73	-.10
結局、自分はひとりでしかないと思う	.70	.01
人間は、本来、ひとりぼっちなのだと思う	.64	.12
私の考えや感じを誰もわかってくれないと思う	.60	-.14
私のことを親身に相談相手になってくれる人はいないと思う	.50	-.13
私のことをまわりの人は理解してくれると、私は感じている	.00	.77
人間は、他人の喜びや悩みを一緒に味わうことができると思う	.09	.73
人間は、お互いに相手の気持ちをわかりあえると思う	-.01	.71
私は、私の生き方を誰かが理解してくれると信じている	-.06	.67
私の考えや感じを何人かの人はわかってくれると思う	-.03	.65
私とまったく同じ考えや感じを持っている人が、必ずどこかにいると思う	-.06	.49
因子間相関	I	—
	II	—

table 3. 他者軽視尺度の質問項目の因子負荷量

質問項目	
私の意見が聞き入れてもらえなかった時、相手の理解力が足りないと感じる	.72
他の人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる	.68
他の人を見ていて「ダメな人だ」と思うことが多い	.68
自分の周りには気の利かない人が多い	.66
自分の代わりに大切な役目をまかせられるような有能な人は、私の周りに少ない	.62
他の人の仕事を見ていると手際が悪いと感じる	.60
寄与率	43.24

table 4. SMSGSE 尺度の質問項目の因子負荷量

質問項目	
どんな状況に直面しても、私ならうまくそれに対処することができるような感じがする	.82
大して努力しなくても、私はたいていのことならできるような気がする	.75
私にとって最終的にはできないことが多いと思う	-.64
やりたいと思っても、私にはできないことばかりだと感じる	-.56
非常に困難な状況の中でも、私ならそこから抜け出すことができると思う	.47
	寄与率 43.94

各尺度得点の相関 table 5 に各尺度の得点について男女別に平均得点と標準偏差を示す。それぞれの尺度について男女別に Pearson の相関係数を算出した (table 6)。

男性では身体満足と他者軽視に負の ($r=-.43, p<.01$)、個別感と共感可能性に負の ($r=-.43, p<.01$)、個別感と他者軽視に正の ($r=.26, p<.05$)、相関がそれぞれ見られた。

女性では個別感と共感可能性に負の ($r=-.38, p<.01$)、GSE と他者軽視に正の ($r=.52, p<.01$)、相関がそれぞれ見られた。

これらのことから男性では、身体満足感と他者軽視、個別感と共感可能性との間に負の共変関係が、個別感と他者軽視との間に正の共変関係があると言えよう。女性については、GSE と他者軽視に正の、個別感と共感可能性に負の共変関係があると言える。

table 5. 男女別の各尺度得点平均値と標準偏差

性別	身体満足	個別感	共感可能性	他者軽視	GSE
男	2.66 (1.11)	2.42 (.87)	3.66 (.85)	2.96 (.98)	2.80 (.84)
女	2.22 (1.03)	2.51 (1.02)	3.93 (.77)	2.91 (.75)	3.03 (.80)

table 6. 男女別の相関分析結果

	身体満足	個別感	共感可能性	他者軽視	GSE
身体満足	—	-.10	.11	-.43**	.17
個別感	.24	—	-.43**	.26*	-.10
共感可能性	-.08	-.38**	—	-.18	-.21
他者軽視	.09	.11	-.16	—	.22
GSE	.05	-.13	.07	.52**	—

* $p<.05$, ** $p<.01$

上段は男性、下段は女性の相関係数を示す

GSE 得点の男女差 性別で GSE 得点に差があるかどうかについて t 検定を行ったところ有意な差はみられなかった($t(128.8)=1.61$, *n.s.*)。GSE については男女による違いは示されておらず、以下、他の要因との関連が GSE に影響しているのかについて結果を整理する。

分散分析 身体満足得点、個別感得点、共感可能性得点、他者軽視得点について、平均点を基準に高得点群と低得点群とに分け、それぞれと性別を独立変数とし、GSE 得点を従属変数とした 2 要因分散分析を行った。各群の *n*、平均点と標準偏差を table 7 に示す。その結果、性別と共感可能性に交互作用が見られた ($F(1,127)=4.72$, $p<.05$)。単純主効果の検定を行った結果、共感可能性の高得点群において、女性の方が男性よりも GSE 得点が有意に高かった ($F(1,127)=7.34$, $p<.01$)。また、他者軽視の単純主効果が見られ、他者軽視の高得点群は低得点群よりも GSE が有意に高かった ($F(1,127)=13.99$, $p<.001$)。

以上のことから共感可能性得点の高い、自分と他者や人間同士において理解できると考えている群においては、女性のほうが男性よりも GSE が高い。また他者軽視得点が高い、すなわち他者への評価の低いもののほうが GSE が高いことが示された。

table 7. カテゴリ別 *n*, GSE 得点平均値 (*SD*)

		男		女	
		<i>n</i>	<i>M (SD)</i>	<i>n</i>	<i>M (SD)</i>
身体満足	低群	31	2.63 (1.02)	39	3.07 (.83)
	高群	35	2.95 (.62)	26	2.97 (.76)
個別感	低群	38	2.89 (.68)	33	3.15 (.86)
	高群	28	2.66 (1.02)	32	2.91 (.71)
共感可能性	低群	34	2.98 (.92)	26	2.88 (.83)
	高群	32	2.60 (.71)	39	3.12 (.77)
他者軽視	低群	33	2.56 (.70)	30	2.73 (.83)
	高群	33	3.04 (.91)	35	3.28 (.68)

因果関係 身体満足、孤独感、他者軽視の尺度得点が GSE に与える影響を検討するために、Amos 24.0 を用いて多母集団の同時分析を行った (figure 1.)。結果から、男女とも他者軽視から GSE へのパスが有意であった。身体満足から GSE については男性で有意な正のパスが見られた。また個別感と共感可能性から GSE については、男性では有意な負のパスが見られた。いずれにおいても女性のパス係数は有意ではなかった。なお、パラメータ間の差の検定を行ったところ、GSE へのパスについて男女のパス係数が有意に異なっていたのは、共感可能性 ($p<.01$) であった。

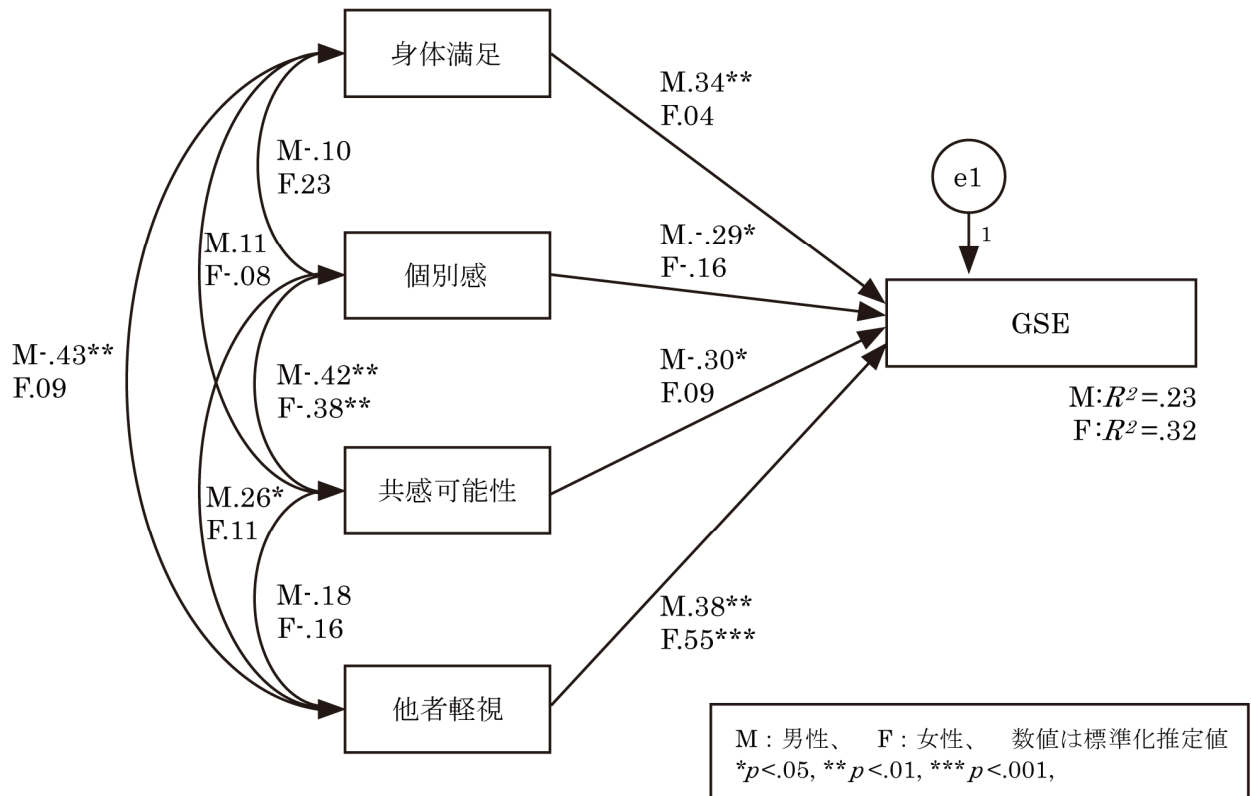


figure 1 GSE へのパス図

考 察

本研究の目的は GSE に影響を与える要因として、身体満足、孤独感、他者軽視を想定し、その影響の有無と程度、さらに男女の差異について、質問紙調査により明らかにすることである。男女の GSE 尺度得点に有意な差が見られなかったことから、それ以外の男女の結果の違いは、GSE への影響の違いが男女によって異なり、それが表れているとして比較することができると思われる。

まず GSE 得点と有意な相関を持つ要因は、男性には見られず、女性では他者軽視に正の相関が見られた。本研究では、GSE に影響を与える要因を探ることを目的としているが、男性については今回取り上げた身体満足、孤独感、他者軽視のいずれも関連が見られない結果となった。女性については他者軽視が関連していることが示唆された。

独立変数として想定した各要因については、まず個別感と共感可能性は男女ともに負の相関を示している。これは個別感が自身や人間の存在を個別のものとして捉えているという概念であり、共感可能性の感覚が人間同士が理解しあえる、という概念であることから、一見相反するように理解することもできるため、自然な結果であると考えられよう。

男性では他者軽視について、身体満足感と負の、個別感と正の相関がみられた。他者軽視傾向の高いものは身体満足感は低い傾向があり、個別感は高くなることが示されている。他者の価値を低く評価し、他者を軽視することは否定的な評価であるため満足感は低いと考えられ、身体に対してもそのような低い満足感として体験されている可能性がある。他者軽視傾向と個別感傾向の正の相関については、本研究で個別感因子として抽出された質問項目は自分が一人で孤立しているというニュアンスを否定できない。他者への軽視は人との関わりと矛盾するし、一人で孤立していると他者を大切にすることが難しいのかもしれない。そのため、他者軽視が一人で存在しているという体験と相関を示したと考えた。

次に、GSE に与える身体満足、個別感、共感可能性、他者軽視の影響について検討していく。

まず分散分析の結果からは、男女ともに他者軽視得点が高いもののほうが GSE 得点が高いことが示されている。他者を低く評価することが相対的に自分のできるという感覚を強めている可能性がある。仮想的有能感が高いと無意識的な自尊感情が高いことはすでに確認されており（小塩・西野・速水、2009）、同様に自己に対して肯定的な体験として GSE に影響を与えているものと思われる。共感可能性得点の高い群においては、女性のほうが男性よりも GSE が高いことが示され、性の効果が見られた。自分と他者や人間同士において理解できると考えている場合、女性の方が男性に比べて GSE が高くなる様々な事柄に対してできるように体験されているのであり、これは男性よりも女性のほうが共感という体験が能力として捉えられ、できるという感覚につながっている可能性があると考えた。

パス解析では、GSE に影響を与える要因について性差が見られ男性と女性では GSE の形成に質的な差異があると推察される。まず、他者軽視から GSE へのパスが男女ともに有意であった。本研究では他者軽視による GSE への影響が確認されたと言えるが、男性については他者軽視と GSE の相関が見られておらず、また全体の決定係数も小さいため、影響としては小さいと言えよう。他者の価値を下げ、軽視することにより、相対的に自分自身ができるという効力感を得ており、自分はできるという体験につながっている。青年期は自己意識が高まり、他者との比較が意識される発達段階であるため、このように他者を低く評価し相対的に自分はできるという感覚を持つことは自然なことであろうし、それはより女性においてみられることが示された。

男性では身体満足が正の、個別感と共感可能性が負の影響を GSE に与えているが、これも有意な相関が見られておらず、また全体の決定係数も小さいため、影響としては小さいと言えよう。女性にはその傾向はみられない。傾向としては、性差によりその影響が異なっていると言えるだろう。身体的満足度については、男性と女性でその質が異なることが考えられる。すなわち青年期までは、男性にとっては身体的に有能であったり、物理的に行動を遂行できる身体的な能力や強靭さが身体的な満足感となっている可能性がある。一方女性にとっては、そのような身体的な能力ではなく、容姿や他の要因が身体満足となっている可能性が考えられる。GSE に影響する要

因としては、できるという感覚であろうから、男性にとっては身体的にできることが満足感となっており、それが GSE を高めることになるのではないか。一方、女性が身体的にできることよりもむしろ容姿など他の側面に価値を置いて満足感を得ているとしたら、できるという感覚とは異なる。身体満足について、その内容をさらにち密に調べていく必要がある。

男性のみ、個別感と共感可能性が GSE に負の影響を与えており、個別性への気づきや人間同士が分かり合えるという理解が、GSE を低めることを示唆している。これについては、孤独感への価値づけが男性と女性とで異なっている可能性が考えられる。人間が個別の存在なのであるという気づきは、男性にとってできる可能性を狭めることになるのかもしれない、またジェンダーのあり方から、理解しあえるという感覚が男性にとっては甘えや一人でではできないという感覚につながっている可能性が考えられる。しかし個別性と共感可能性は負の相関が示しており、いずれも GSE を低下させる要因となっている。男性にとっては自分一人で成功できないという感覚と、周囲と共感できるがそれは自分で出来る事と矛盾するという感覚とが共存している可能性が考えられるだろう。

このように、GSE に影響を与える要因とその程度については性差が見られ、GSE の形成の質的な差異が示されたと言えよう。しかし GSE の形成過程やその機序については、独立変数についてはより精緻に設定するなどしてより詳細に検討していくことが必要であり、今後の課題としたい。

本研究では GSE に影響を与える要因として、身体満足、個別感、共感可能性、他者軽視を取り上げ、検討してきた。GSE に影響を与える要因は男女で異なっており、男女いずれも他者軽視は正の影響を与え、男性のみでは身体満足が正、共感可能性は負の影響を与えていることが示された。ただし、男性についてはいずれの尺度得点も GSE 得点と相関が見られず、また決定係数も小さいことから、その影響は大きくはないと考えられる。いずれにしても男女で独立変数への価値づけが異なっている可能性が検討された。今後さらに自己効力感に影響を与える要因について探っていき、その変容の可能性を含めて検討していくことが期待される。それにより GSE 研究の知見は臨床や教育、産業領域にもこれまで以上に広く応用されていくと考える。

文 献

- Andersson, L. M., Moore, C. D., Hensing, G., Krantz, G., & Staland-Nyman, C. (2014). General self-efficacy and its relationship to self-reported mental illness and barriers to care: A general population study. *Community mental health journal*, *50*(6), 721-728.
- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological review*, *84*(2), 191-215.

- Boer, H., Elving, W. J. L., & Seydel, E. R. (1998). Psychosocial factors and mental health in cancer patients: Opportunities for health promotion. *Psychology, health & medicine*, 3(1), 71-79.
- 速水敏彦 (2006). 他人を見下す若者たち 講談社 .
- 速水敏彦 (2011). 仮想的有能感研究の展望. 教育心理学年報, 50, 176-186.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 (2004). 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 51, 1-7
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 (2005). 他者軽視に基づく仮想的有能感 自尊感情との比較から感情心理学研究 12, 43-55.
- Hayamizu, Y., Kino, K., Takagi, K., & Tan, E. H. (2004). Assumed-competence based on undervaluing others as a determination of emotions: Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, 5, 127-135
- 速水敏彦・小平英志 (2006). 仮想的有能感と学習観および動機づけとの関連. パーソナリティ研究, 14(2), 171-180.
- Hwang, E. J., Maverick, M. A., Savini, K. E., & Newman, S. (2014). Correlating self-efficacy and lifestyle with quality of life among adolescent mothers. *Journal of Occupational Therapy, Schools, & Early Intervention*, 7(3-4), 272-283.
- 伊多波美奈・首藤敏元 (2016). 大学生におけるボランティア経験とボランティア活動に期待する成果, 自己効力感, 及び協調性との関連. 埼玉大学紀要. 教育学部, 65(2), 35-46.
- Jerusalem, M., & Mittag, W.(1995). Self –efficacy in stressful life transition. In A. Bandura (Ed.), *Self-efficacy in changing societies*. Cambridge University Press. Pp.177-201. 山本多喜司 (訳) (1997). ストレスフルな人生移行における自己効力 本明寛・野口京子 (監訳) (1997). 激動社会の中の自己効力 金子書房 pp154-178.
- 小平英志・小塩真司・速水敏彦 (2007). 仮想的有能感と日常の対人関係によって生起する感情経験. パーソナリティ研究, 15(2), 217-227.
- 松田晶子・佐藤真理子・張替直美 (2005). 糖尿病患者の性差による自己効力感の違いについての検討. 山口県立大学看護学部紀要, 9, 17-23.
- 三好昭子 (2003). 主観的な感覚としての人格特性的自己効力感尺度 (SMSGSE) の開発 発達心理学研究 14, 172-179
- 三好昭子 (2008). 人格特性的自己効力感の形成に影響を及ぼす要因についての探索的検討. 立教大学心理学研究, 50, 11-24.
- 三好昭子・大野久 (2011). 人格特性的自己効力感研究の動向と漸成発達理論導入の試み. 心理学研究, 81(6), 631-645.

- 中川泰彬・大坊郁夫 (1985). 日本版 GHQ 精神健康調査票手引 日本文化科学社
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 (1995). 特性的自己効力感尺度の検討：生涯発達の利用の可能性を探る 教育心理学研究, 43, 306-314.
- 落合良行 (1983). 孤独感の類型判別尺度 (LSO) の作成 教育心理学研究 31 332-336.
- 小塩真司・西野拓朗・速水敏彦 (2009). 潜在的・顕在的自尊感情と仮想的有能感の関連. パーソナリティ研究, 17(3), 250-260.
- Sherer, M., Maddux, J. E., Mercandante, B., Prentice-Dunn, S., Jacobs, B., & Rogers, R. W. (1982). The self-efficacy scale: Construction and validation. Psychological reports, 51(2), 663-671.
- 杉本英晴・速水敏彦 (2012). 大学生における仮想的有能感と就職イメージおよび時間的展望. 発達心理学研究, 23(2), 224-232.
- 宇恵弘・辰本頼弘 (2017). スポーツ・キャリアパターンが特性的自己効力感の形成に及ぼす影響. 関西福祉科学大学紀要, (20), 79-90.

Influences of physical satisfaction, loneliness, and undervaluing others on generalized self-efficacy in university students.

Junji MORIDAIRA

Abstract

In this research, I have considered physical satisfaction, loneliness, and undervaluing others each as a factor influencing generalized self-efficacy (GSE) in university students. These factors were measured using 1) question items asking about physical satisfaction; 2) the Loneliness Scale by Ochiai, which consists of two subscales, awareness of individuality and standpoint about possibility of empathy (Ochiai, 1983); 3) the assumed-competence scale (Hayamizu et al., 2004) as scale of undervaluing others; and, 4) the Scale Measuring a Sense of Generalized Self-Efficacy: SMSGSE (Miyoshi, 2003). One hundred thirty-one university students completed the questionnaires. The results from the path analysis indicated the following: (a) factors influencing the GSE are different between males and females, (b) in males and females, undervaluing others has a positive influence; (c) in males, physical satisfaction and empathy possibility both have a negative influence; (d) the coefficient of determination is small in males; and, (e) in males, neither scale score is correlated with the GSE score. Further, I examined the possibility that body image and human relations, and even self - efficacy, are differed between men and women.